

中小企業には中小企業の財務の見方がある！

「財務分析」と言うと、様々な〇〇比率を算出して比較検討する「比率分析」をイメージされる方が多いようです。

〇〇比率の中でも、特に重視されるのが「自己資本比率」で、自己資本比率を高めることを財務の最重要目標とされている経営者の方も多いと思います。

なぜ自己資本比率を重視されるかをお聞きすると、「銀行が決算書の中で自己資本比率を重視しているから」とお答えになる方も多いですが、銀行が自己資本比率を最重要視しているかと言うと、実はそうでもないことの方が多いようです。

ちなみに、銀行は、自分たちの自己資本比率は何よりも重視しています。

銀行の自己資本比率は、国際業務を行う金融機関で8%、国内業務を行う金融機関で4%を下回ると、監督官庁である金融庁から早期是正措置というものが発動され、経営の自由度が著しく減ることになります。

巨大企業である銀行では、自己資本比率1%の違いは、経営陣の今後の経営方針を大きく変えるくらい、強烈なインパクトがあるのです。

【中小企業の決算書は疑われている？】

一方で、中小企業ではどうでしょうか？

実は、銀行員が中小企業の決算書を分析する上で、比率分析は、その企業の実態を把握する上でほとんど役に立たないと考えられています。

その理由の一つは、中小企業の決算書の数字は、真実を表していないことの方が多いからです。

大企業のように監査法人が会計監査を行っているわけではないですし、中小企業では監査役も名ばかりの場合が多いものです。

中小企業の決算書の数字はあてにならない、というのが銀行員の常識です。

おそらくは正しくないであろう決算書の表面の数字をもとにして自己資本比率を算出してみても、全く意味がないのです。

銀行が自己資本比率を算出する際は、必ず、「実態バランスシート」に基づいて算出しています。

同じ得意先に対する売掛金が何期間も同額で記載されている、売上高は横ばいなのになぜか売掛金・棚卸資産が毎年増えている、売上高が減少傾向なのに売掛金・棚卸資産が減っていない、売上高がアップダウンしているのに税引後当期利益はなぜか毎期数十万円で横並び、このように、中小企業の粉飾決算というのは、比率などわざわざ出さなくても、5年間くらいの数字の増減を見れば簡単に見破れるものが多く、銀行員は、そのウソを除いたところで自己資本比率も見ており、健全なる猜疑心をもって財務を見るのが銀行員の見方です。

【少額の変化でも比率が変わるので意味がない】

また、中小企業では、会社規模が小さいため、少額の変化でも比率が極端に変化します。

例えば、総資産1億円の会社があるとします。資本金1千万円、繰越利益500万円とすると自己資本比率は15%です。年商は1億円とします。よくある中小企業と思います。

この企業が3月決算だとして、付き合いのある信用金庫から、「3月末に1,000万円を保証協会付きで借りていただけないか」と依頼されたとします。このような融資セールスはよくあることだと思います。

この会社の期末の総資産は1億1千万円、自己資本は融資を受けても当然増えませんが、1,500万円のまま、だとすると自己資本比率は13.6%になります。

自己資本比率が1.4%下がりましたが、この企業の財務は悪化したと言えるでしょうか。

10兆とか100兆なんて総資産を持つ銀行にとって自己資本比率1%の違いは重すぎます。信用金庫でも1兆を超える総資産のところはざらにあります。

それに対して中小企業では、総資産の分母が数千万、数億円といった規模ですので、数百万とか数千万円で自己資本比率は簡単に変わります。

そのような自己資本比率に一喜一憂するとかえって判断を誤るとというのが銀行員の考えです。

先ほどのケースであれば、自己資本比率が1.4%下がることより、現預金に1,000万円の余裕が生まれたことの方が銀行員にとっては重要だったりするのです。